

グローバルな視野をもち、未来を切り拓く児童の育成

北海道教育大学附属札幌小学校

校長 高久 元

担当者 河原 秀樹

1 本校の ESD の特徴

本校は「共生の文化を創造する学校」という教育目標を掲げ、長年に渡り周囲の自然環境を生かした環境教育を実践してきた。ここ数年間では、学校近くを流れる茨戸川（ばらとがわ）や大学周辺の緑道（周囲約 3 km）での自然体験や観察を行い、身近な自然に親しんでいる。また、食物の栽培と収穫を通じた学習を行い、自然環境と食料生産について学ぶ機会としてきた。2015 年からは環境教育やエネルギー教育に取り組み、地球規模の課題に目を向けたり、身近な生活から持続可能な取組を捉えたりするようにしている。

2 活動全体計画

2020 年より新しくなった教育課程の中で、各教科・領域でエネルギーや環境に関わる学習、持続可能な生産と消費に関わる学習、地球規模の課題の解決を考える学習、海洋に関わる学習、防災に関わる学習を位置付け、それぞれの学びを一層充実させることで、グローバルな視野をもち、未来を切り拓く児童の育成を図っている。

教科・領域	学年	単元名
社会	5 年	「これからの食料生産とわたしたち」「自然環境を守る」
社会	6 年	「地球規模の課題と国際協力」
理科	6 年	「生物と環境」「電気の利用」
生活	2 年	「水の中の生き物を見つけよう～茨戸川探検～」
総合	4 年	「エネルギー調査隊」
総合	4 年	「わが街札幌冬編～雪と暮らすお話発表会」
総合	5 年	「食を究める」
特別活動	4 年	「南極クラス」
特別活動	全学年	「命と安全を守る授業」
特別活動 総合	4～6 年	「エネルギー新聞」 (経済産業省資源エネルギー庁 「わたしたちの暮らしとエネルギー」かべ新聞コンテスト)

3 活動事例

①環境教育に関わる活動

2 年「水の中の生き物を見つけよう～茨戸川探検～」

学校のすぐ近くには茨戸川が流れている。茨戸川は、古くから漁業に利用されてきたこともあり、現在でも釣り人は多く、水生生物が多数存在する。茨戸川に複数回足を運び、入水して水生生物の採集を行った。学んだことを「茨探水族館」として 1 年生に発信する活動を行うことで理解を深める取組を進めてきた。



② 持続可能な生産と消費に関わる学習

5年「食を究める」「これからの食料生産とわたしたち」

総合的な学習の時間として、自分で野菜を選び、お世話から収穫まで探究的に取り組む活動を行った。また、農家の見学を通して、環境に配慮した生産を学んだ。

社会科では、食料生産人口の減少とスマート農業などにみられる取組を比較し、持続可能な農業の在り方を考えた。



③ 海洋に関わる学習

4年「南極クラス」

実際に南極で観測を経験した越冬隊員の方を講師としてお招きし、南極の自然や越冬隊員の生活についての話をいただいた。南極と日本の環境の違いや、地球温暖化やオゾンホールといった研究について学んだり、実際に南極の氷に触れたりして、体験的に環境問題やエコエネルギーについて学ぶ姿が見られた。



④ 地球規模の課題の解決を考える学習

6年「地球規模の課題と国際協力」

地球規模が抱える貧困、紛争、環境などの課題を解決するために、日本は世界と協力してどのような国際協力をしているのかを調べた。例えば、ユニセフが教育にお金をかける意図を考えることで、未来の国の自立を支援していることを捉えていった。



⑤ エネルギー教育に関わる学習

4～6年「エネルギー新聞」

本校では毎年、高学年児童が学習したことを活用して、経済産業省資源エネルギー庁「わたしたちの暮らしとエネルギー」かべ新聞コンテストに応募している。各教科等で学んだことを基に、新聞にまとめることはもちろん、毎年多くの入賞作品があり、自分の学びへの自信となっている。



4 成果と課題

社会や理科、総合的な学習の時間など、教科横断的に取組を進めてきたことで、児童の探究活動が豊かになると同時に、様々な視点から多角的に考える力が育まれてきていると感じる。今後は、見学活動や調査活動などの充実を図り、より実感を伴った体験的な学びを重視していきたい。